

B-5) 脳動静脈奇形破裂による脳内出血にて発症し多発性神経膠腫を呈した Turcot's syndrome の1孤発例

梅澤 邦彦・隈部 俊宏(東北大学)
城倉 英史・吉本 高志(脳神経外科)

Turcot's syndrome は脳腫瘍と colorectal polyposis を合併する稀な遺伝性疾患である。今回我々は AVM を伴った Turcot's syndrome の1孤発例を経験したので、報告する。症例は16才男性。家族歴に特記事項はない。14才時に AVM 破裂に伴う皮質下出血にて発症。MRI にて右頭頂葉の皮質下出血の他に、左前頭葉および左側頭葉の皮質から皮質下に T1WI で low, T2WI で high を示す多発性病変を認めた。造影効果は認めなかった。AVM に関しては摘出術とガンマナイフ治療を施行した。follow-up MRI にて多発性病変は漸次拡大傾向を示したため、当科入院となった。入院時神経学的に異常所見はなかったが、羸瘦を認めた。入院数日後より下腹部痛を訴え、高熱と下痢を呈した。大腸 fiber にて下行結腸から S 状結腸に multiple polyposis と cancer が認められ、結腸全摘術を施行した。多発性脳内病変は定位的脳生検の結果、fibrillary astrocytoma と診断された。本症例は Brain Tumor-Polyposis syndrome, いわゆる Turcot's syndrome と考えられた。本症例の如く、多発性神経膠腫を生じた Turcot's syndrome で更に AVM を合併した症例は未だ報告されておらず、文献的考察も含めて報告する。

B-6) 精神症状で発症し、部分摘出術を行った髄膜腫の2例

増山 祥二・府川 修(いわき市立総合)
三谷 慎二・伊藤 誠康(磐城共立病院)
松野 正俊(同 神経内科)

髄膜腫の治療成績は、画像診断や塞栓術を含む手技の発達により向上しているが、頭蓋底部や sinus に接したものは治療困難な例も多い。今回我々は無理な摘出を行わず、術前認められた精神症状を改善せしめた2例を経験したので報告する。症例1は74歳女性、平成7年9月中旬より物忘れがひどくなり、会話しても返答しない等の症状が出現し、同年10月当科に入院した。入院時意識は JCS 2、運動・知覚障害は認めなかった。改訂長谷川式簡易知能 scale で7点であった。左 parasagittal meningioma の診断にて手術を行い、腫瘍を約70%摘

出した。一過性の右片麻痺が出現したが改善し独歩退院した。退院後痴呆症状は消失した。症例2は48歳女性、平成8年8月頃より視力低下、同年10月より頭痛を自覚、またこの頃より無気力となり、だらしく仕事をよく休むようになった。平成9年2月当科に入院した。入院時意識は JCS 1、視力は左右とも 50 cm 指数弁で、両側視神経萎縮を認めた。運動・知覚障害はなかった。高次脳機能検査にて精神機能の脱抑制が目立った。tuberculum sellae meningioma の診断にて手術を行い、腫瘍を約30%摘出した。術後視力の回復は認められなかったが、高次脳機能検査で脱抑制的な言動は改善し、独歩退院した。

B-7) Lymphoplasmacyte-rich meningioma の2例

山下 慎也・川口 正
鈴木 健一・森 宏(新潟大学)
竹内 茂和・田中 隆一(脳神経外科)

Lymphoplasmacyte-rich (LPR) meningioma は1993年、WHO により新たに分類された髄膜腫の亜型であるが、報告例は少ない。通常髄膜腫に比較して若年、女性、頭蓋底に好発する傾向が報告されているが、いまだ不明な点が多い。今回小児に発生した LPR meningioma の2例を報告する。【症例1】7才女児。進行性の両側聴力低下にて発症。右感音性難聴、右顔面知覚障害あり。MRI にて頭蓋底硬膜、右 Meckel's cave 内、右前頭葉、両側上顎洞に多発性腫瘍病変あり。聴力障害に対し右内耳道減圧及び生検術施行。さらに両側視力低下を併発したため、右視神経管減圧術施行。現在頭蓋底病変に対し照射療法中である。【症例2】7才女児。単純頭部外傷を期に、無症候性の右小脳テント上面の隆起性病変を指摘され、腫瘍摘出術施行。病理組織は、両者とも meningotheial component に著明なリンパ球と形質細胞の浸潤が認められた。

B-8) 後頭蓋窩静脈洞内を伸展した papillary meningioma の1例

遠藤 勝洋・前野 和重
仲野 雅幸・藤田 隆史(福島県立医科大)
佐々木達也・児玉南海雄(学脳神経外科)

目的：静脈洞内を伸展した papillary meningioma の1例を報告する。症例：17才の男性。頭痛とめまい

を訴え近医を受診した。CTでlt. CP angleにmass lesionを認め、開頭部分摘出術を施行された。2ヶ月後、精査と治療を目的に当科に入院した。Gd MRIでconfluenceからlt. transverse sinus, sigmoid sinusに沿って増強されるmass lesionがjugular veinまで伸展していた。Feeding arteryをembolizationした後、頭蓋内の腫瘍摘出を行った。1年後にCP angleのmassが再び増大したため、これを摘出しconfluence近傍のmassにgamma knifeで放射線治療を行った。現在左の聴力が軽度低下しているが社会生活が可能な状態である。結論：Papillary meningiomaは浸潤性で悪性腫瘍の範疇に入る。後頭蓋窩の静脈洞からjugular vein内に充満し、顎下部まで伸展していた本症例を呈示し、治療法について考察する。

B-9) mesenchymal chondrosarcoma の一例

太田 浩彰・牛渡 一盛 (小山市民病院)
脳神経外科
小川 彰 (岩手医科大学)
脳神経外科

今回我々は頭蓋内発生は稀とされているmesenchymal chondrosarcomaと診断された一例を経験したので報告する。症例は31歳男性。平成9年2月より頭重感出現し当科受診。CTにてfalxの左右の石灰化と脳腫瘍を認め入院となる。神経学的には軽度うっ血乳頭のみであった。MRIにて腫瘍は硬膜に広く付着しGd-DTPAにより強く増強された。脳血管撮影にて腫瘍は左前大脳動脈の分枝、左中硬膜動脈、左浅側頭動脈の前頭頂頂枝よりfeedingされ、前大脳鎌動脈の拡張も見られた。髄膜腫の診断で両側前頭開頭にて手術を行ったが出血が多く部分摘出にとどまった。組織では核は大小不同の類円形で分裂像はなく多数の血管を伴い増殖し、一部軟骨化も見られた。免疫組織的にはVimentin陽性の部分がありEMAには陰性であった。以上よりmesenchymal chondrosarcomaと診断されたが、髄膜腫やhemangiopericytomaとの鑑別が重要とされた。

B-10) Painful ophthalmoplegiaを呈した cavernous sinus内 hemangiopericytomaの1例

木村 憲仁・佐々木雄彦
安斉 公雄・福岡 誠二 (中村記念病院)
岡 亨治・大里 俊明 (脳神経外科)
及川 光照・武田利兵衛 (財)北海道脳神
堀田 隆史・中村 博彦 (経疾患研究所)

Hemangiopericytomaは、全頭蓋内腫瘍の1%未満の稀な腫瘍であり、cavernous sinus内の発生は極めて稀といえる。我々は、painful ophthalmoplegiaを主症状とするcavernous sinus内 hemangiopericytomaを経験したので、その臨床経過並びに放射線学的所見について報告する。症例：48歳女性、既往として1997年8月に下腿骨腫瘍の摘出術を受けている。同年9月より頭痛を自覚。12月上旬より左眼瞼下垂が進行し12月17日当院入院。入院後、動眼、滑車、外転神経の麻痺が進行し、左眼窩後部の頑性疼痛を伴った。頭蓋単純写にて、蝶形骨洞部の骨の硬化と左頭頂骨の骨透過像を認めた。MRIでは左cavernous sinus内にT1WI, T2WIともにisointensityのmassを認め、同部はGd-DTPAにて軽度の均一な造影効果を認めた。脳血管造影では、cavernous sinus内の内頸動脈がわずかに狭窄し、inferolateral trunkから栄養される腫瘍陰影が、cavernous sinusとsphenoid sinusの骨の部分に認められた。1998年1月9日左頭頂骨のbiopsyに引き続き、1月13日cavernous sinus内の腫瘍の摘出を行った。病理診断は頭頂骨部、cavernous sinus内腫瘍ともに、hemangiopericytomaであった。

B-11) 硬膜下膿瘍の4例

野下 展生・天竺 雅春 (山形市立病院)
齋藤 桂一・佐藤 壮 (済生館脳神経外科)
成田 徳雄 (米沢市立病院)
脳神経外科

【目的】硬膜下膿瘍は全頭蓋内感染症の約10~20%、脳膿瘍の1/5程度と比較的稀な疾患である。我々は痙攣発作を伴った10歳の硬膜下膿瘍の1例を経験したので、過去の自験例3例と併せて報告する。

【症例】症例は10歳、女性。頭痛、熱発で発症し、痙攣発作を伴った硬膜下膿瘍である。原因は前頭洞炎に由来するもので、当初は抗生剤による保存的治療を行っていたが改善は傾向なく、2期的に開頭排膿及びドレナージ術を施行し良好な予後を得た。他の3例は、2例が副鼻